

大型礎石建物 59 トレンチ

整地層の確認



この建物跡の基礎部分では、整地した土の層が見つかりました。この地域の基盤層には元々石が多く含まれますが、この整地層には石がほとんど入らず、褐色の上層と黒色の下層の2層によって水平に整地され固くしまっています。

これまで見つかった建物跡（SB01：次頁参照）では明確な整地層を確認しておらず、遺跡内で初めての発見であり、この大型建物が、他の建物より周到に建築されたことを物語っています。

出土した瓦

この建物の一帯からは大量の瓦が出土しました。瓦の文様からこの建物は8世紀前半に建てられたと考えられ、多胡碑に記された多胡郡建郡の時期と合致します。

また出土瓦の中には、9世紀以降の年代と考えられるものも含まれており、この建物が9世紀まで存続していた可能性を示しています。



ふくべんろくべんれんげものきまるかわら
①複弁六弁蓮華文軒丸瓦
平成 24 年度出土



たんべんれんげものきまるかわら
②単弁蓮華文軒丸瓦



②と同じ文様の瓦
ざつきみ
雑木味遺跡出土

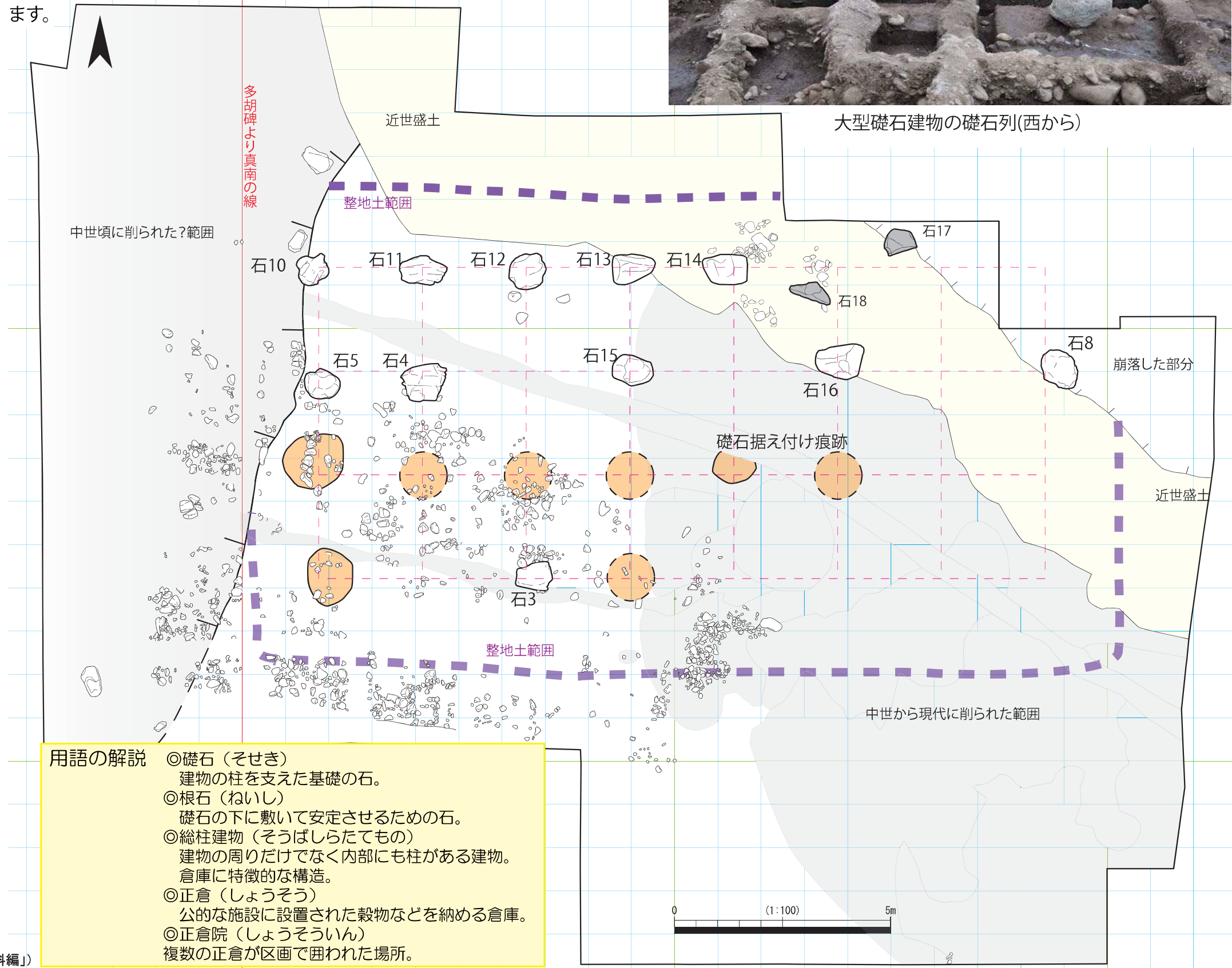
（関東古瓦研究会 1997「シンポジウム関東の初期寺院資料編」）

岡地区の北側、河岸段丘の北端で今年度確認した建物跡です。大きさ1mほどもある礎石が並んで検出されました。柱の間隔は2.4m（8尺）を測り、東西16.8m、南北7.2m（7間×3間）の規模であったと推定されます。礎石が無い柱位置でも礎石を据え付けた痕跡と根石が確認できたことから、柱筋の交点すべてに柱を持つ総柱式建物であると考えられます。この建物構造から、これは高床の倉庫（正倉）であることがわかりました。

屋根は総瓦葺で大規模な建物であることから、多胡郡正倉の中で最も格の高いシンボリックな倉（法倉）と考えられます。県内での礎石建瓦葺の正倉の確認は初めてで、全国的にも希少であり、多胡郡が国家的事業として建郡されたことをうかがわせます。



大型礎石建物の礎石列(西から)



用語の解説

- ◎礎石（そせき）
建物の柱を支えた基礎の石。
- ◎根石（ねいし）
礎石の下に敷いて安定させるための石。
- ◎総柱建物（そうばしらたてもの）
建物の周りだけでなく内部にも柱がある建物。
倉庫に特徴的な構造。
- ◎正倉（しょうそう）
公的な施設に設置された穀物などを納める倉庫。
- ◎正倉院（しょうそういん）
複数の正倉が区画で囲われた場所。

南側の区画溝 57トレンチ

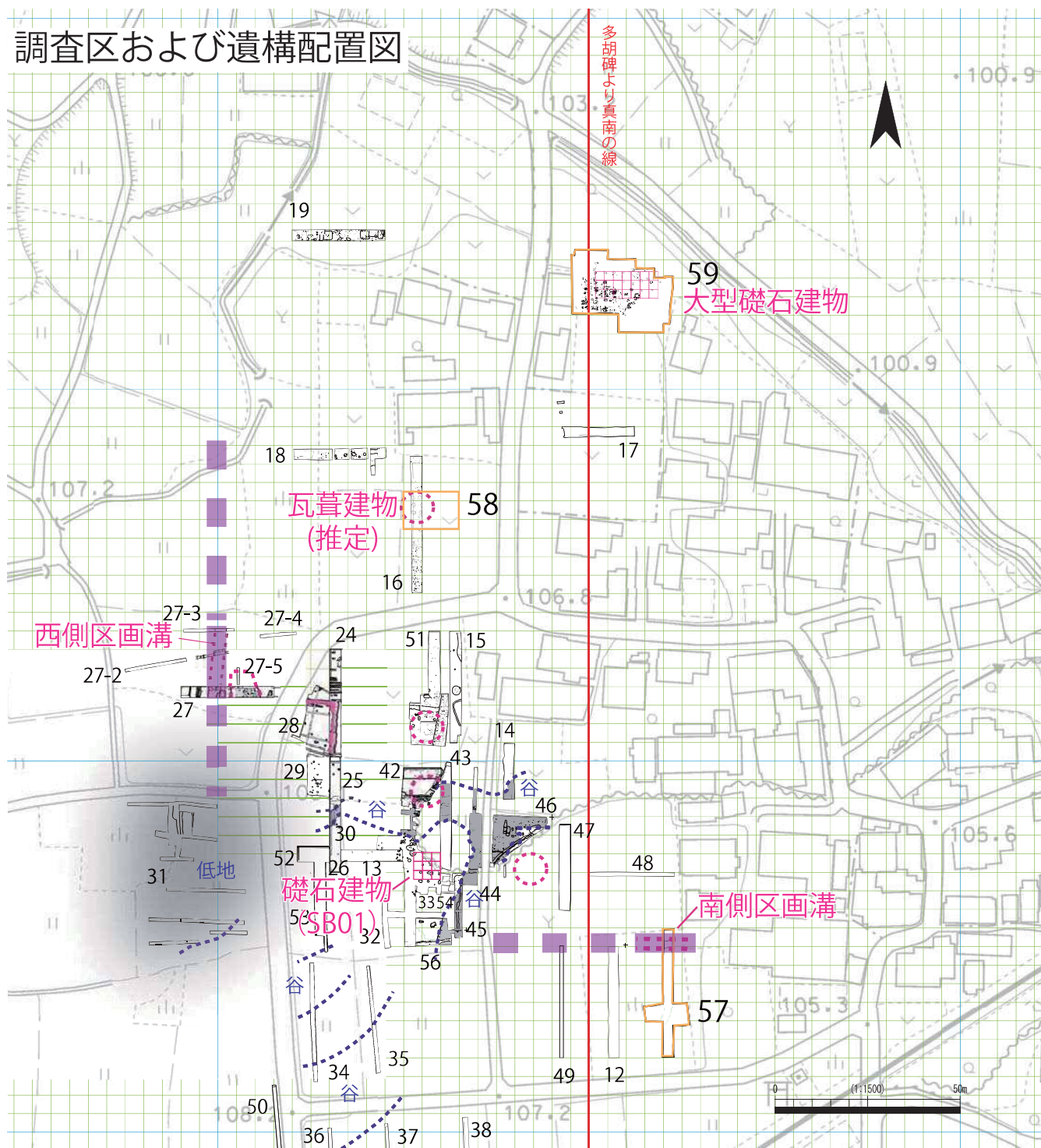
遺跡南側の57トレンチにて、東西方向にのびる溝を確認しました。耕作により溝の上部が削られていますが、現状で幅2m・深さ50cmの溝の底の部分が残っていました。

溝の中からは、奈良時代のものと思われる布目のついた瓦が出土しています。



57トレンチ 南側の区画溝

調査区および遺構配置図



多胡碑周辺遺跡 第5次調査(平成27年度) 現地説明会資料
平成28年1月30日 発行 高崎市教育委員会文化財保護課

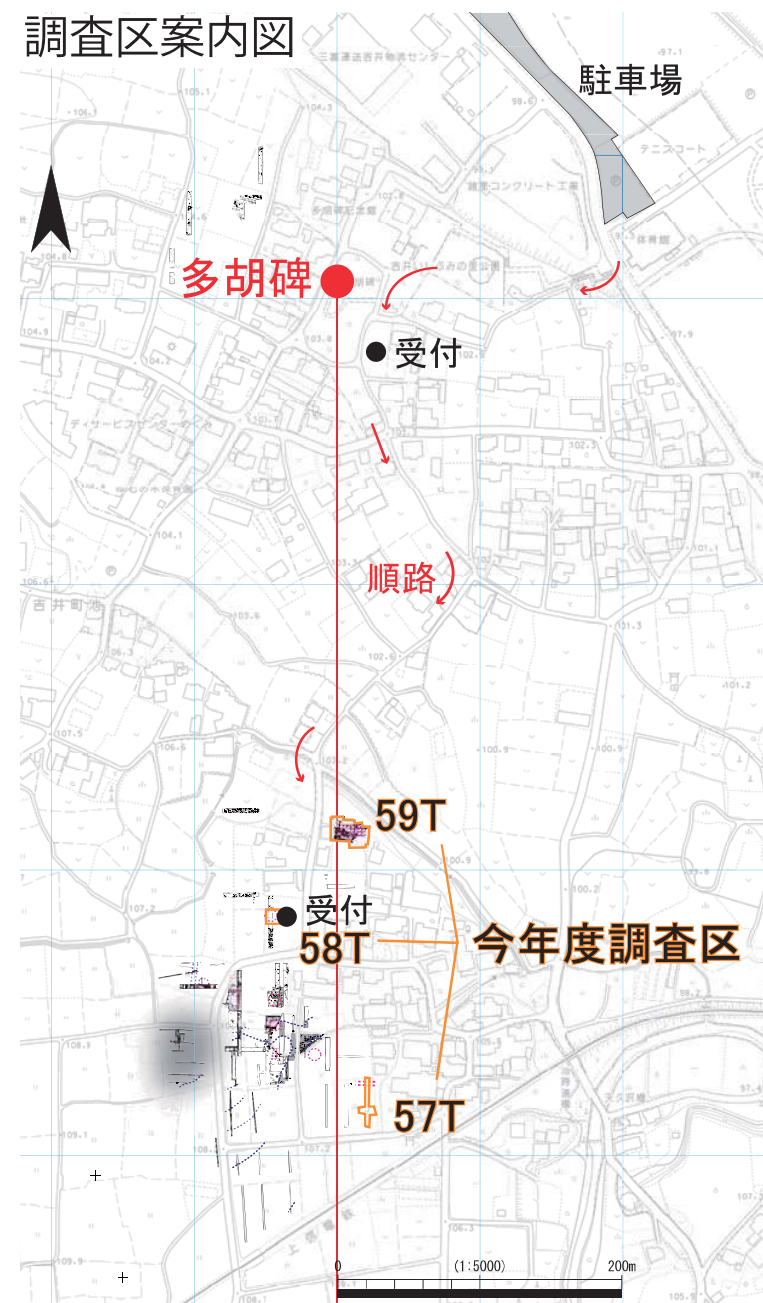
多胡碑に記された多胡郡の正倉を発見！

多胡郡正倉跡

第5次調査（平成27年度）

現地説明会 資料

調査区案内図



多胡碑周辺遺跡の発掘調査は、今年度で5年目になります。

これまでの調査では、多胡碑の真南にあたる岡地区で、大型の倉庫である「正倉」が確認されました。

今年度の調査では、巨大な「法倉」^{ほうそう (のりくら)}とよばれる正倉を確認し、この場所が多胡碑と同じ奈良時代の正倉院^{しょうそう いん}（倉庫群）であることが、より確実となりました。

また、これまでに正倉院を囲む西側の区画溝が確認されていましたが、南側を区画する溝も確認し、遺跡の範囲を検討するうえで重要な発見となりました。

今年度の調査成果をふまえて、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会の指導のもと高崎市教育委員会では、この遺跡を「多胡郡正倉跡」と呼ぶことにしました。

高崎市教育委員会